

プログラム

開会挨拶 NPO法人「杉田玄白・小浜プロジェクト」
司会 山口隆弘「生晃栄養薬品 取締役生産本部長」

理事長 小西淳二

セミナー I

1) 「明智光秀も知っていた越前朝倉家の薬・セイソ散」

講師：石川美咲(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員)

16世紀は日本医学史上の転換期であったと考えられています。乱世を反映して、この時代に新たに確立した医術に「金瘡(きんそう)」があります。金瘡とは戦傷その他の救急医療のことを意味します。平時は助産にも応用されていました。近年、明智光秀が口伝した内容をまとめた『針薬方(しんやくほう)』という金瘡医術書が新たに見つかりました。その中に「セイソ散 越州朝倉家之薬也」と記される「疵(傷)付薬」がみえます。『針薬方』と同じ頃に成立した金瘡医術書にも「生蘇散」の表記で金瘡薬がみえます。さらには江戸時代に至っても物語の中に朝倉氏の金瘡薬として「生蘇(しょうそ)散」がみえます。戦国時代、朝倉氏は最先端の医薬ともいえる金瘡薬「セイソ散」を作り出し、それは医術に通じた光秀からも注目されていたのです。

2) 「セイソ散の薬用成分と薬効について」 講師：渡邊英明(同上 学芸員)

『針薬方』によると、セイソ散は傷を負った際に使う付薬として紹介されており、バショウの巻葉、スイカズラ、キハダ、ヤマモモの実と皮からなる薬とされています。バショウ、スイカズラ、ヤマモモにはタンニンという物質が多く含まれています。タンニンはタンパク質と強く結合し、傷口に被膜を作り、血管を収縮させることで止血する作用があります。スイカズラやヤマモモにはさらに、強い抗酸化力によって細菌の増殖や炎症を抑えるフラボノイドが含まれています。また、キハダの内皮にも抗菌・抗炎症作用のあるベルベリンが含まれています。このようにセイソ散を構成する4種類の生薬には止血や抗炎症、抗菌作用をもつ成分が多く含まれています。これら各生薬の薬効がセイソ散にもあると仮定すると、切り傷や打撲等の外傷に効果があったと考えられます。

セミナー II 「杉田玄白先生を巡る2つの薬～テリアカと昇禾水～」

講師：山村 修(福井大学医学部地域医療推進講座 講師)

杉田玄白先生は若狭小浜藩の勤務医と江戸日本橋の診療所の開業医を掛け持ちする臨床医であるとともに、私塾「天真楼」に数多くの弟子を受け入れる教育者でもありました。玄白先生は技術伝承が秘伝とされがちな江戸時代において、企業秘密とも言える最新の処方箋をあっさりとして弟子に伝えています。当時としては革新的な教育スタイルです。そんな玄白先生が弟子たちに伝えた2つの薬が「テリアカ」と「昇禾水(しょうこうすい)」です。古代ギリシャで発明された解毒薬であるテリアカは、イスラム圏やヨーロッパ圏から世界中に広まり、やがて長崎のオランダ商館を通じて、江戸時代の日本に持ち込まれました。昇禾水は1754年にヨーロッパで開発された梅毒の治療薬で、やはりオランダ商館を通じて日本に伝来しました。講演では、2つの薬の普及に携わった玄白先生の活動について、ご紹介いたします。